

関西学院千里国際高等部 本物の高等教育に挑戦できる、教育連携（兵庫県）

実施体制の概要

- 全校生徒数：282名（うちSGH対象生徒数は全員）
 - SGH対象学科：
 - 普通科（指定4年目からは総合探究科を立ち上げ）
 - HP：
 - https://www.kwansei.ac.jp/sis/sis_016681.html
 - [高校生のための課題研究サポートシリーズ]
 - <http://www.r-fair.info/handbook-shs/>
 - SGH委託費用総額：約3,930万円（H27～R1：約580万円～約1,000万円）
- 校内の体制：SGH委員が主となり、授業担当、メンター担当などすべての教員が関わりを持つ。管理職にコアとなる教員がいたことも有効に
 - 国内連携機関：
 - 関西学院大学を中心に、名古屋大学等とも連携
 - 連絡先
 - ✉ kyoshimachi@soismail.jp
 - 072-727-5050（代表）
 - 学校Facebook： <https://www.facebook.com/sois.jp/>
 - 学校youtube： https://www.youtube.com/channel/UC1yRtQgSgiT8gdN51z-S6ag/videos?sort=dd&view=0&shelf_id=0

何を目指したか

高い国際通用性を有するレジリエンスに富むグローバルリーダーの育成

ツールのポイント

- 1 国際協力の専門家との、本物の高等教育への挑戦の機会と、成果に繋げるメンターの存在。
- 2 2か月という夏季休暇をSGHに自主的に熱中する時間に。

SGH事業実施に必要な資源



■事務職員1名を委託費の中で捻出。ポストSGHに全学的な取組として継続することを意識し、全教員が関わりを持つ体制を構築。（当初SGH委員に業務集中していたことを改善）



■委託費を上回る部分も多く、高等部内の持出しや、生徒負担で海外渡航費用などを捻出。プログラム講師料のうち関西学院大学については無償での関わりを得られている。



■指定1年目は高校生を自由参加としていたが2年目から全員必修にしたため、一気に負担が増えた。



■特にメンター教員は1教員が3名程度の生徒の研究を引き受けるため、負担が大きく理解を得るのに試行錯誤し、2年程度の時間を要した。

Plan

ツール作成の背景

- 1991年の学校創設から、大阪インターナショナルスクール（OIS）と共に、理念、キャンパス、多くのプログラムを共有し「Two School Together」の考えのもと切磋琢磨。インターナショナルスクールと共にある本校ゆえ、国際性は本校の文化そのものだった。
- この国際性の文化を、高校生自身のアクションに繋げるべく、SGH指定の教育でさらに磨きをかけることに挑戦した。特に国際性を身近に感じる本校だからこそ、「そう簡単に文化の壁を越えられない」日常体験から、レジリエンスの必要性を痛感。
- また、2010年の関西学院大学との合併を受け、SGHを契機に高大連携が加速。「大学の4年の学びでは足りない、高校生から教えたい」という熱意を持つ大学教員の声掛けで、国際機関での豊富な勤務経験を持つ村田俊一ゼミ（関西学院）との協働を開始。

SGH事業計画の流れ



Do

ツールの解説

✓ 大学生と同じ立場で参加する 大学との教育連携

- 村田ゼミとの協働では、大学のゼミ生向けの課題（ケースワーク）を高校生にも投げ、企画コンペをさせるなど、本物の高等教育を大学生と同じ立場で挑戦させる機会を用意。挑戦を個別に高校のメンター教員が支援
- この他にも大学との共同研究として、課題探究サポートシリーズを開発し、「高校課題探究ハンドブック」などを開発、公表。

■村田ゼミなどの取り組みは拡大傾向にあり、高校生・大学生双方の学びのモチベーションの源泉に。

✓ 夏季休暇期間を活かしたプログラム

- インターとの共存ゆえ夏季休暇の長い本校は、夏季休暇中にSGHの学びに熱中していく生徒が多い。
- 高2のフィールドスタディ授業で「面白いかも」と生徒に感じさせるきっかけ作りを足掛かりに、理系大学への課外学習やトビタテ！留学JAPANなどを活用した留学、村田学校（合宿形式で大学生と議論）への参加など、自主的に学びを深める。
- 本校の生徒の主体性を尊重する校風に加え、1生徒に1名のメンター教員がいることも困ったときの支えに。

Check

取組内容の評価

- 授業や授業外の活動を通じて、地球市民としての意識が高まっていると感じると肯定的に回答した生徒の割合が7割以上に達している。
- またエゴレジリエンス尺度で3年間の縦断調査をすると、伸びている傾向にあり、取組当初の、将来への課題意識が重要な要素になると分析。
- 質の高い高大連携の結果、SGH 関西学院への進学 その後大学生として高校とのSGHの協働を提案するケースも。

Action

指定期間終了後のいま

- ポストSGHを指定4年目から意識し、総合探究科を設置。課題探究を本校の基軸に据えるべく、教科を軸に、より継続性のある3年間の研究を志向。
- 課題探究を教科に任せることで、先輩の研究蓄積を後輩に繋ぐ役割を教員に期待。今後は他分野からの目も上手く取り入れ、中等部、大学との長期的な教育連携を目指す。